宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊26番
定価一年 送料共500円

十周年たなばた揮毫会

―大島中津宮に於て―

去る七月二十三日、大島に於て行なわれ、成功裡に終了した。

この七夕揮毫会は、昭和三十一年に宗像大社中津宮主催によって開催されてから今年で十周年を迎えた。

中津宮境内には古くから未社牽牛、織女の両社が祭られており、これが縁結びの「七夕さま」である所から、習字や裁縫その他の上達を祈願するようになったものである。

参加者は郡内の小中学生、さきに七月三日、千二百名の参加者によって予選がなされ、そのうちの六六五名が当日の揮毫会に参加した。

当日は丁度夏休み中でもあり、レクリエーションを兼ねた人々もあって、神湊からの渡海船「中天丸」は満員の盛況であった。

折からの悪天で海がしけ、船は揺れた。その上、時折りの驟雨さえ加わった。それでも父兄同伴のよい子たちは、元気一杯、各便とも大賑わいを呈した。

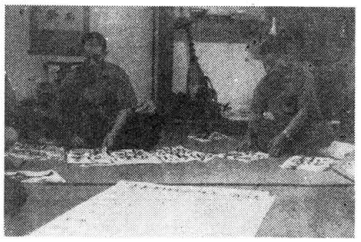


写真　上　審査風景
　　中　どれを出そうかな
　　下　賞状授与

それぞれの学年毎に一教室が使用されて、愈々揮毫会が始まった。

わが子の運筆の一点一画を、窓越しに、ドア越しに心配そうに見守る父兄の顔・顔。

揮毫は、人数が多いので、四回に分けて行なわれた。

書き終った作品は、中津宮の事務受付に持参され、そこで参加賞として神紋入りの円鏡型鉄文鎮を渡された。時に午後二時半。最終審査の済む迄は何れも小さな胸をときめかせ乍ら、結果の発表を待った。

審査は中津宮拝殿で行なわれた。坂口雅風、古賀計水、城戸筑山の三氏がこれに当られ、いずれも立派な作品を選定するのに苦心されていた。

午後三時過ぎに、審査終了。入選作品は、中津宮楽門両袖の廻廊に貼り出された。

同時に拝殿に於て「中津宮揮毫会十周年記念大会奉告祭」が斎行された。終って久保宮司の挨拶があった。この行事が十周年を迎え得た喜びと、これ迄、この大会の発展のために、御指導、御協力をいただいた各関係者、更に参加した生徒及び父兄の方々に感謝と御礼を申し上げる、というのが、その趣旨であった。

特に十周年記念にあたり、この会の発展のために、御尽力いただいた審査の先生方を始め、後援者のヒロカネ商会と、尚文堂、大島の河野幸人、越智汎愛、玄海町の中野貞治、津屋崎の大隅正義の各氏に感謝状と記念品の贈呈がなされた。

特に例年特別の努力のもとに参加して立派な成績をおさめている赤間小学校四年生の簡口正志君には、宮司より努力賞と記念品が贈られ、続いて小中学校のうちの学校単位の最優秀校、並びに入選生徒名の発表と、記念品授与が萬雷の拍手のうちに行なわれた。

当日は踏切事の合間を縫って大島観光協会と大島商工会の協賛による「ささえ取り」が行なわれた。よい子たちは、雨の晴間を見て、海水着に着替え、浅瀬をはしゃぎ廻った。大島の海水は澄んでいる。大波止の内湾を遊び廻る小中学生と、その父兄たち。こんな機会でもなければ、こんなに多勢の人が一度に渡島することもないであろうし、又これが親子で大島に渡る絶好の機会になっているようにも思われる。

十周年記念の揮毫大会は無事に終った。一つの行事を企画し、これを長年にわたって継続することは大変な努力を要するし、これを存続発展させんがための関係協力者の情熱は尊い。そして、一つの理想とする目標に対して精進を続ける機会を青少年に与え、これらが一体となってはじめて立派な成果が期待される。十周年記念の揮毫大会が無事に行なわれたことは、このことを立証したのであった。

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(371)八八六九八九三七七二番
振替口座京都一五八九一番

暑中御見舞申し上げます
昭和四十年盛夏
宗像大社宮司　久保輝雄
職員一同
「宗像」編輯部

論説

老母のお化粧

伝統は、いつの時代かに、民族が創造したものである。農漁村の風俗慣習も、それが古くとも新しくとも過去の生活の積み累ねであって、歳月の経過と共に改革もあり興廃もあって、幾星霜確固不動のままに今日生きているものはない。伝統は今日を生きる者も創造してゆくべきで、客観情勢の変化に即応して修正も亦当然の理である。これが因襲打破とも言われる。

新時代の文化を呼吸する若人と、これを家庭に擁して因襲を守ろうとする親達の間に、多くの矛盾撞着が発生し、農漁村一般の家庭に苦悩する人間図が見られるのは過去の時代も同じだったに違いない。その苦悩の中心に常に母性が立っている。

嫁いで数十年、伝承の大地に耕作の汗を流し、荒海に家人を送り出して網を繕い、額に皺を刻んだ主婦の苦悩は戦後の急転する世相によって、更に重くかぶさってきたのである。

「お母さんは何で農家に嫁いだの、わかりやすやの姑に仕えて朝から晩まで畑仕事に炊事、私など絶対に農家にはゆかない」と、年頃の娘の一言。母なる屋家の女性は、ふと忘れていた「一個の女である」自分を顧みる一時があると人生は嬰だその中に自分自身を認めることが先ず第一の務めだと、ニーチエは語った。何も西欧哲学者の言葉を借りるまでもなく農漁村の母性は封建的因襲に反逆する若い子女から逆教育をうけている形で、老境の苦悩は深いに違いない。

産業経済の急速度の発展は農漁村の自主経営に問題を投げかけている。我が国の農漁村経営の伝統は新時代の機械化、経済生活の複雑化に影響をうけて、古い姿のままの存続は困難な様相を呈してきた。封建時代の農漁村独自の生活方式の存続は許されなくなった。専門家の所謂農漁村の体質改善に関する意見は、昨今の政治経済論議に屡々見うける。農奴解放から出発した共産革命の営農方式が、そのまま我が国に転用されてもいけないし、資本主義国家のモデルケースとも見られる米国流の模倣でもいけない。国情民族性の根本的相異は、異質の体調にそのまま適応出来ないことも知るべきである。

話が横道に走った。難しい農漁村の未来像解明でなく、平易に母性の苦悩の基底をなす事情と、それに対応する在り方に就い聊か結論的所感を述べてみたい。

「お母さん、もっとお化粧をしなさい、お母さんだってなだからもっとお化粧して、いつまでもキレイでなくては」と。これが青春期の娘の注文である。母性は驚く然し女である以上娘の言うこともよくわかる。

農家に嫁いで耕作の明け暮れ、姑に仕え子女を養育する、お化粧など若嫁の日のカドある場合だけで、遠くに忘れ去ってきた。良き子女を生み育てて世に出したい母性の念願は農漁村も変りはなく、むしろ現実の肉体的精神的労苦の多い農漁村の母親たちの方が、一層強いかも知れない。娘は都会地に嫁いでゆく、息子は大学を出て農漁村には帰ってこない。母性の念願は達せられても、家を守る子女のない寂しさはやる瀬ない。

長男に家業を継がせても、適当な嫁が容易に得られない。これも農漁村の母性の深刻な嘆きである。山林がいかほど、田畑が何町と、農家としての地盤の重量を誇っても、現代の娘は逆に重い荷物と考える。ない方がよい。田畑が何町あろうと漁船を何艘持っていようと、それは主婦となる者の厄介な重荷で、処分して着物一枚買うことが許されるわけでもなく、次代へ伝えるまで営々苦心して守り通すだけ。何も持たないサラリーマン、因襲に縛られない都会生活、これが若い女性の概ね一致した言い分。一概に悪い傾向とは言えないだろう。

「嫁が自動車の免許を取ったので、今日は若夫婦でドライブに行きました。孫を預って留守番をしていますが、よくこんな農家に嫁に来てくれたと感謝しています」と。或る農家の老母の話である。ここに新しい時代の農家の母性の秀れた考え方があると思う。自分の娘はその希望する都会地へ嫁がせる。他から新しい文化を呼吸する若嫁を迎えて家を守る。船の固守だけで解決のつく問題ではない。ここに老母のお化粧が必要になってくる。身も心も薄化粧して、皺をかくして欲しいと考える。

×　×　×

阿蒙少言

「この頃電気代が多くなったネ冷蔵庫扇風器と電気ばかり、少し節約したら」と農家の姑「お母さんが心配することないヨ、私たちが働いて払っているんだから」とデンカ主婦「そこのウチワを取っておくれ」と非電化の明治の手が呼ぶ。○昨今の電化ブームは辺地の農山村まで浸透した。電化していないのは、嫁ぎた頃石油ランプの掃除をした姑の頭だけ。○「おばあちゃんはニギリだネ、お母さんが言っていたヨ」と無邪気な孫。ニギリが意張りを意味する悪口とは知らぬ幼児、ママの姑非難の隠口を亜気で明るみに出す。消費文化を呼吸する若い女性が、石油ランプの掃除を自慢にする明治翠の生活慣習に、満足する筈がない。ここに型通りの新旧衝突の悪気流が、家庭に渦をまき。○デンカ、ママが足をなげ出してココアをすゝりながら響楽を聴いている「吹雪さんのシャンソンはいいネー」と感に堪えたる一声「何がソンをしたの」と若眼鏡のアゴがあがる。相撲でなってもアゴがあがると大抵の勝負は負け「黙っていらっしゃい」と秒速五百米の一弾。明治は弱くなりにけり。○泣いて笑ってオコってかいをねだってもパールの指輪購入計画を持つママの財布はかたい。孫は昭和をあきらめて明治に鞍替えする。ニギリの汚名返上と矢地回復は先ず孫から。ヘソクリの財源は亡夫の恩給であること、孫はいさゝかも知る由はない。「おばあちゃんが甘いからいけないのヨ」アトム時代の姑教育は、かくの如く活発に行われつつある。○「田植え草取り、何の因果で農家に来たのでしょう」と。愚痴は言いたもうな、その内に突頭十両の佐藤首相が百姓恩給と農業勲章を打ち出すだろう。

（白雲）

第五十一回　宗像大社献詠歌会詠草

七月六日　於社務所詠草到着順

名残竹原　円
禿山に挿穂の床の赤土を吾が堀りをればカッコウの鳴く

福間　井原　元彦
久し振り友が来るてふ日曇日来るよで来ぬよな雨となりけり

神湊　隣船　俊
何事のおはしますかはてふ古歌の誠しのばる沖津大宮

和布刈　永島　まち
献歌かしこみつゝもなつかしくたより来し遠早も一年

村山田　吉田佐市郎
麦秋の手不足見かね八十の吾も気を張りて麦を刈るなり

陵厳寺　真鍋　万三
ながの年蛮夢のお世話に為りし身は重なる恩義を如何で返すべき

宮田　片山　一
田も畦もれんげの花は咲き盛る孫を抱きてその畦を行く

福岡　高橋　昇
年毎に種木の伸びや石に苔十坪庭に生命流るゝ

厚狭　篠田　俊樹
迫りくる青葉に風のよみみるて松蝉の声は重たかりけり

香椎　織田　橡雨
真く道はゆく人まれにして草の戦ぎうたて一世のすがたかも

（蕉翁の句に思ふ）

大濠　江崎　琴子
梅雨もようつしき日なり庭にいでゞゴニヤの枝を鉢に移植す

津屋崎　麦野　時雄
荒れ庭のどころどころにあでやかに今を盛りと咲き咲く爽

遠賀　長畑　房江
鉢植の山椒芽吹くと亡き妻の一年祭のたよりにありき

戸畑　伊規須ゆき
このあさけ苗代ざむの冷えしるし毛物を重ね苗とりまさむ

朝町　井上陽之助
晴れ澄める天つ空吹くそよ風に吸ふ息ふかし朝よすがしく

遠賀　福原ヨシカ
床頭のこほひ袋の香に顧ちて賑ひ友を寂しく思ふ

多礼　藤崎保五郎
年老い母とならびて吾子達が麦刈るさまを病臥に憶ふ

手光　森　八蔵
神かけて今年の作を祈るなり門田の稲の青き朝風

平井　土性　とよ
パッと音立つる如くに日ゆりは張り一ぱいに保つぶくらみ

吉留　松本はぎの
梅雨晴間電線に来て雀らは喋く如く囀りやまず

江口　辻野　開造
ほのぼのと明け行く空にのきさめまどろむ我の夢をゆぶりつ

戸畑　田中ハツセ
目の前にボーリングする若き等の玉を追ひつゝ我は見るのみ

勝浦　永島　計七
車停め展望に胸ふくらむ久住高原緑の爽風

東郷　藤崎　辰子
屋根に上げしヒーターの朱新しく夏至今日の陽を集めるなり

コロラド　浦野　薫
見はるかす五十英町の芋畑一斉に咲く桃色の花

東郷　小野角次郎
水無月の山の響きに簡津瀬の飛沫戯らして木木の主ちる

〃　小野　花居
四方の山緑なす家に読書するさえづりの声清くゆみじむ

武丸　立石　昇
郷子しげる木蔭の湯壺にひたりつゝしばしの憩ひ楽しむわれは

（ジャングル温泉にて）

武丸　立石ろせの
日曜毎々と帰り来し孫二人障子に落書のこゆきたり

田島　小野　迪夫
つゆの晴間多礼山に舞ふ鳶一つ目追ひつゝわれもたゆたふ

福岡　吉田　信夫
ねむたくてもづかる孫を抱き出で岡にのぼれば麦刈る人出づ

吉留　山下しづえ
送られて沈む思ひを消すがごと夜汽車の窓にネオン輝く

〃　白木うめの
眼下の新緑の谷遣ひ下る霧は幾重も層をなしつゝ

大井　安部　重郎
菜殻火の消えて夕闇濃き道を帰りぬ星の一つ流れぬ

駐車場用地拡張さる

当社心字池埋立に伴う境内駐車場拡張工事は、去る五月第一次の埋立作業を完了して、第二次の路地作業に入った。埋立当初は地盤が軟弱な為、地盤沈下等があるので工事は見送られていたが、梅雨明けを待って本格的に始められ、この程完工した。

工事は、永松商事が当り、先ず排水溝敷設から着工され、今迄池に流入していた排水管等が溝に纒められて一本化された。駐車の為に障害となる樹木は移植されたり、伐採されたりして明るくなった。埋立地はローラーで展圧され砂石が敷かれて見違える様な広場となった。面積凡そ一ヘクタール程である。

又、宝物館脇の駐車場も整備され、県道から境内に入る入口が別に設けられた。これで当社駐車場は今までに較べて、約三倍程拡張された事になる。これで当社の駐車場問題は一挙に解決されたわけで、約七百台の自動車が駐車出来ることになった。

近い将来、大社では境内の主要な部分を舗装して拡殿を建設する計画を持っている。拡殿が完成すれば、参拝の貴様は雨天でも、炎天でも気持良く車を入れて詣る事が出来るわけで、大社では、その計画を検討している。

神社史編纂委員来社

去る九日より十三日迄、東京より小島鉦作、梅田義彦の両氏が来社された。宗像神社史は、さきに昭和三十六年六月に宗像神社復興期成会の手によって上巻が刊行されていたが、続いて下巻を上梓べく鋭意編輯が進められているもので、今回の委員来社はその最終調査とも云うべきものである。

両氏共にお忙しいところを来社され（因に、小島氏は成蹊大学教授、梅田氏は文部省宗務課調査官）短時日の間に大きな成果をあげられた。郡内各地は云うに及ばず、期間中に佐賀県呼子の田島神社にまで出掛けて行くという精力的な勉強ぶりであった。

帰京される十三日にも、小島氏は午前中は当社の古文書などを熱心に調べられ

「あと一日、少くとも半日程ほしかった」

と洩らされた程であった。

神社史の原稿が最終的に纒まる日も近い。恐らく来年あたり神社史としては最高水準の学術書として公刊されることと思われる。

神湊海水浴場開き

去る七月九日午前十一時十分、宗像郡玄海町神湊海水浴場の海開きと水神祭が斎行された。これに先だって玄海小北校生徒四十余名が先生の指導で砂浜一帯の清掃を行った。水神祭には大森町長を始め横山助役、古賀宗像警長等、関係者多数が出席、海水浴シーズン中の無事故を祈願した。

又、玄海小学校では十二日より一週間全校生徒の水泳訓練を実施する予定でカナヅチの生徒をなくし楽しい海水浴シーズンを送りたいとの事であった。

〝エイッ〟〝ヤーッ〟と暑中げいこ入り

夏休みが始まった二十一日から当社少年剣道部の暑中げいこが始まった。

朝の七時から一時間、場所は玄海小学校（もとの田島校）の南校舎講堂、集る少年等約四十名。

ああ、愛のごぜん様よ、お手やわらかに願います、と金と力のない非人婿はじめ家人は祈った。

非人婿もごぜん様に劣らぬヘソマガリの一面を具えている。不満の一言を発する（ごぜん様の顔に書立派に戦死を遂げたではないか、

奴、と娘がかわいゝばかりに、如何に気に入らぬことがあってもこのヘソマガリとは争わなかった。唯、のニガ手であったかも知れない。村の長老達が直接ごぜん様に言いにくい事は彼に頼んだ。彼が条理を尽して話しても、ごぜん様は承知のこともあったらしい「こやつ腹を立てさせたら一生家に寄りつかないかも知れぬ」と良解の一言を発する（ごぜん様の顔に書が爆発したら百年でも意地を貫くいてあった。

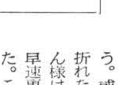
恥を知れ」この一言はまさに無法である無法は承知で言っている。長男の生還をどんなに喜んでいたことか、ただ次男喪失のやる瀬ない憤激を、長男に投げつけただけである。

ビルマ戦線の長男が山河幾千里の苦労を重ねて復員、漸く家に辿りついた夜、客が帰ったあと親子の大格斗が展開された。古い家の大黒柱をゆする騒動の原因は、沖縄で戦死した次男を惜しむ矢も楯もたまらぬ強烈な愛情からである「貴様はなんで捕虜になって帰って来た。弟は立派に戦死を遂げたではないか、

戦後娘達一家は大分県の奥山でキコリの生活をした。ごぜん様は神主に引き戻したかったが、身上に干渉しないとの非人婿との約束を守って見過していた。マッカーサーの進駐で神主界の様相も大きく変貌して、多数の敗戦官司が誕生した。ヘソライの嫌いな神主はこの道の長老のメガネに適わず大抵下積みで終ったが、敗戦は必ずしもヘソライ者を優遇しなかったので、ヘソマガリも浮かび上る機会があった。

非人婿はその後奥山を下って、敗戦官司の列に加わった。ごぜん様もこれを見て安堵したことだろう。「あいつは酒に弱いのが玉にキズだ」と高原で盃をなめながら、非人婿を見守っていることだろう。

宗像談話室　非人に娘をやった　ごぜん様



葉月のまつり

二一日　夏季大祭　午前十時

前日の夏越祭に引き続いて行なわれる。一年の中の季節にあたって産業文化の振興、五穀豊穣、大漁満足の祈願祭が行なわれ、特に交通安全大祈願祭を行なう。

七日　七夕まつり

一ヶ月遅れの七月七日にあたるので、中津宮末社、牽牛社、織女社のたなばた祭があり、夕刻から境内で七夕おどりが催される。

今月の交通訓

笑顔で運転　明るい社会

用水碑を建立

――宿谷池畔に――

去る七月十四日、真夏の日が照りはえる時、田島宿谷、一ノ谷にて宗像大社用水池碑が建てられた。これは当大社の氏子会長である吉武儀市郎氏所有の畑地に良質多量の水源を発見、昭和三十年二月一八日　当大社に奉納されたのを記念して建てられたものである。

当地方は水質が悪くその中にあってこれは珍らしく良質の水なので、現在は宿谷附近一帯の日常生活の上で重要な役割をはたしている。以前からこの部落一帯は水に難儀していたが、この水源地発見にともない昭和三十五年には、総工費八四万二千円也（内国庫補助金三〇万、地元分担金五四万二千）の工費を以て宿ノ谷共同給水施設を施工している。

〝ヤーッ〟と

稽古は、先ず拭き掃除から始まる。道場の床を磨くことは自分の心を磨くことと同じ、ということで、掃除もさっと済ませる。

少年等は満七才から、十六才迄の小中学生である。二列に並んで、順繰りに相手を交替して稽古をする。メン、ドウ、コテと可愛いい気合いがこだまする。

かくてほぼ一時間の稽古。勿論一同汗びっしょり。

稽古が済んで汗を拭いている時に　指導者のお話しがある

「夏休を楽しめ。但し勉強や、宿題はちゃんとやるんだぞ。遊びに出かける時は、行先と帰りの時間をお家の人に云って出なさい。危い所へ行くんではない。特に海水浴には小さい者だけで行ってはいけない。ふだんに、どんなよい子であっても間違いがあっては何にもならない。親に心配をかけないようにする。これが剣道だ」

なるべく小さい者たちに対して語られる。それから黙想、神拝をして解散する。

四日五日と経った。気分的にも、肉体的にも「中だるみ」が来る。みんなで励まし合い乍らの稽古が続けられる。

暑中げいこは二十八日迄続けられた。部員のうち、休んだ者は、遠い親戚へ出かけた者二、三名のほかは殆んど皆勤した。要は熱意である。

二十八日は、一稽古の後、紅白試合を行った。最後の総仕上げである。格段の進歩を示して、豆剣士たちが元気一杯試合をした。

この日、八時半に柏屋郡志賀町剣友会の今年十二名が竹下先生に引率されて到着した。直ちに親善稽古と試合を行なった。

二十九日は稽古なし、正午に神社に集合をして神湊の浜に出かけて暑中稽古打上げの浜遊びをした。リレー、西瓜割り等をやって楽しいひとときを過して帰った。

少年剣道部をはじめてから五年目の暑中げいこも、かくて無事終了した。（因に、七月二十二日付の毎日新聞に当社の暑中げいこのことが報道された。）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像十四城（三）

宗像四郎氏貞（三十八）

山下半可　作
福田長庵　画

東の奥には大友義鎮が豊後に、西方及び、その南方には筑前の立花道雪、肥前の竜造寺隆信、更に南の薩摩には島津義久が控えており、これらは時として、筑前に乱入して彼等の馬蹄のかがめくゝところとなっていた時代である。

陶入道全薫がいかに中国の覇者として強盛を誇っていたとしても、所詮は海を一つ隔ている。これは、中国側についた宗像党にとっては決定的な弱点であった。

妙なことに、九州諸党のうちに中国の大内、陶、それに続く毛利と結托した者は少ない。一時的には政策上戦略上に於て、手を握ったことはあっても、血縁関係を数代にわたって迄結んで、中国側についた者はいなかった。

独り宗像党のみが例外の存在となって、最後迄、その意地を貫いて戦い通したのである。

その意地の背骨となったものは「神領」の意識であった。宗像宮の社務職である大宮司家は祀官職属する沖ノ島に沖津宮、大島に中津宮、田島に辺津宮の三宮があって、一体を形づくっている。

祭神はそれぞれ、田心姫神（たごりひめのかみ）、瑞津姫神（たぎつひめのかみ）、市杵嶋姫神（いちきしまひめのかみ）を奉祀している。日本書紀神代巻上によれば、この三柱の神は皇祖天照大御神と素戔嗚神との誓約の時に生れました神で、いわゆる天孫の降臨に先だち、天照大御神は御子神の三女神に対して、

汝（いまし）三柱の神は宜しく道の中にあまくだりまして、天孫を助け奉りて、天孫に祭（いつ）かれよ。

との神勅を下された。よって宗像大神は「海北道中」すなわち、九州北辺の宗像三宮の地に鎮座し給うたと伝えている。

宗像大神の別の神名を「道主貴」（みちぬしのむち）と申し上げる。これは、国民道をはじめ、あらゆる「道」を司る最高最貴の神であることに対する尊称である。

さて、鎮座地のこのあたりは、往古から文化、交通、外交、貿易産業、軍事等にわたって海外に対する功要の門戸として重要な地位を占めている。まさに国家鎮護の神域であり、いかなる外部勢力によっても冒されてはならない性格を有しているのである。よって古来朝廷をはじめ、上下の信仰が厚く、その神域を守るための数々の禁忌が厳重に保持されている。

国史にあらわれたところを見ると、宗像大神はつとに神功皇后征韓の際に神助をあらわし給うたと、三代実録に見え、応神天皇は同知使主が呉国よりもたらした織女のうち兄媛（えひめ）をいち早く当社に進められたと日本書紀応神天皇の条に見える。同書履中天皇の条には神戸再献のことが見え、ついで雄略天皇は使を遣わして当宮の神を祀られたと、同じく雄略天皇の条に見えている。

大化時代以前に於て、このような尊崇を受けたことは、当宮のおかげをたのむことが必然的であったことを示しており、朝廷の威令を行い、国家を守護するの上に於て欠くべからざる存在であることを示しているものと云える。

大化改新によって国郡の制が布かれると間もなく、全国七社（伊勢大神宮、安房神社、熊野坐神社、宗像神社、鹿島神宮、香取神宮、日前国懸神宮）に神郡を制定せられ、宗像一郡が九州では唯一つの例ともいうべき「神郡」として当宮に寄せられた。（つづく）

宗像宮（一）

大宮司氏貞は社務職として宗像宮の由緒を調べて見た。そして宗像宮の意義というものが、我が国の存立上容易ならざる所以を知ったのである。

先ず、宗像宮は筑前国宗像郡に属する沖ノ島に沖津宮、大島に中津宮、田島に辺津宮の三宮があって、一体を形づくっている。

祭神はそれぞれ、田心姫神（たごりひめのかみ）、瑞津姫神（たぎつひめのかみ）、市杵嶋姫神（いちきしまひめのかみ）を奉祀している。日本書紀神代巻上によれば、この三柱の神は皇祖天照大御神と素戔嗚神との誓約の時に生れました神で、いわゆる天孫の降臨に先だち、天照大御神は御子神の三女神に対して、

汝（いまし）三柱の神は宜しく道の中にあまくだりまして、天孫を助け奉りて、天孫に祭（いつ）かれよ。

との神勅を下された。よって宗像大神は「海北道中」すなわち、九

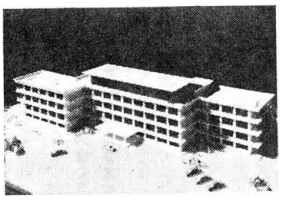
東海大学福岡分校地鎮祭

―宗像森林都市の近くに―

七月十三日午前十一時、東海大学福岡分校の地鎮祭が当社司祭のもとに執行された。

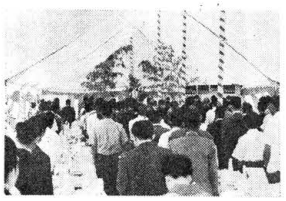
建設地は赤間駅西方一キロの宗像森林都市入口の景勝の地にある。ここに鉄筋四階建の校舎が建設されることになる。

大学当局の話によれば設立の趣旨は「九州は中央といささか距離的にはなれていること、及び年々本学への進学希望者が急増している実情を考え、さしむきこの地宗像に工学部の教養課程を開設し、本学建学以来の一貫した教育理念を達成したいと念願している」由である。



祭典時間が迫るにつれて参列者、報道関係者が陸続と集まり、その数凡そ三百人さしもの大天幕もあふれ出んばかりになった。

定刻、式は修祓、祝詞奏上と進み大学関係者、森林都市関係者によって厳粛に、杭打ちの行事が行なわれ式は盛なる厳粛に終了し、ここに大学設立の大いなる礎がきずかれた。



祭典終了后東海大学松前重義総長より次の要旨の挨拶があった「わが国の大学は法文系と理工系とにおける学生数のアンバランスという大きな問題を抱えこれが日本の社会の跛行状態の大きな原因となっている。これを是正する為本学では法文系に対しては少数精鋭主義、理工系に対しては多数主義を採用し、日本の社会の体質改善にそなえんと意図するものである」

想えば若き宗像郡は、さきに福岡学芸大学の建設、次いで今日の東海大学の建設と学園都市として大きく変貌しつつある。亦この健全な発展は江湖の識者のあまねく心を寄せるところとなっている。この秋にあたり、かの伝統の醇朴なる気風を基盤にし、それに加うるに清新なる都市の建設を計るならば必らずや神郡宗像は近代都市として力強い発展を遂げるであろう。

それだけに地元民の期待も亦大きいものがあるのである。

さて、神社としても氏子区域の新しい時代相に直面して、いかに対処すべきかが問題になろう。長い将来の見通しに立脚して、神社の在り方と地域社会との結び付等をよく考えて見るべき時である。これは全国的な問題でもある。

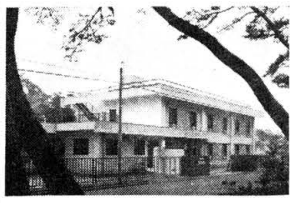
八幡大学海の家完成

積雲たちのぼる夏空のもと、各所で山開き、海開きが盛んに行なわれているとき、こゝ宗像郡玄海町大学神湊の松林の中に鉄筋コンクリート造、二階建の八幡大学の海の家〝臨海学舎〟が七月十九日完成、当社司祭により新築落成式が盛大に行なわれた。

八幡大学の臨海学舎は去る四月十日に着工し、七月十九日落成した。

風光明媚な国有林の松並木に囲まれたこの学舎は大学及び附属高等学校の学生等、並びに教職員、家族、父兄、同窓生等が利用出来るように、夏季修練のための厚生施設をかねて建設されたものである。

学生はこの学舎において団体生活や、身体鍛練を、又女子学生には茶道、生花等の講座を開き、課外活動にあっては各サークルの合宿など、学校内では通常困難な教育をこゝでする目的をもって建設されたものである。その他、卒業生の会合、学生と、その家族のレクリエーション、教職員、及家族等と学内関係者の広い範囲、目的に使用出来るようになっている。



全学舎は神湊海岸まで二百米の釣川河口左岸の松林にかこまれた地にあり「海の家」にふさわしい場所である。

工費四千万円をかけ、二千六百四十平方メートルの敷地に建てられた（延べ八百十二平方メートル）モダンな建物である。一階は四十二畳の私室、大広間を中心に、私室三部屋、七十二人収容の食堂娯楽室（七ヶ所）など。二階は八人用の洋間、個室九部屋があり、屋上にはバトミントン、卓、ベンチ、それに水銀灯もつき、夕涼みができるようになっている。

各地宗像会開かる

戸畑宗像会

北九州のシンボル若戸大橋が目前に押せまる景観の地、戸畑豊山閣に於て、去る六月二十七日戸畑宗像会総会が会員八十数名の出席、又北九州市吉田市長参加のもと盛大に行なわれた。

先ず副会長、近藤重次郎氏の開会の挨拶があり、次いで会長高木茂李氏、病気入院中につき、副会長竹内信夫氏の挨拶が次のようにのべられた。

生活環境を同じくして育った郷土人が、幼い頃の思い出の回想に、或いは心をゆるして交わすこだわりのない雑談等、宗像会の集いほど肩の凝らない楽しいものはありません。

幾百年の昔から祖先が朝な夕なに生活していた山野につつまれて、四季それぞれの景色を眺めて暮した私共、祖先が聞いた蝉の声を聞き、祖先が遊んだ山野を跋渉し、或は祖先が祀った宗像神社に詣でては一族の繁栄を祈り、祖先の霊に護られながら、素朴な田舎の気風の中に育ってきた私共ではありましても、たのしい思い出と共に心は遠く故郷につながれるのであります。

徹頭徹尾孝養に身を尽された武丸の正助さん、太くなれと後輩に指導した外交官の平田知夫さん。伊豆は凡夫にして凡夫にあらず、乃木大将から愛された伊豆凡夫少将、人情味に溢れた入江仁六中将、海軍兵学校生徒を厳粛に愛情を以って育成された出光万兵衛中将、医学界の権威者武谷広先生、銀行界の林繁蔵さん、運輸界の安座上良さん、鉄鋼界の安永渡平さん、その他、幾多の故人大先輩の皆様が、社会のために尽されて行くであろう。

将来はバスケットボール、バレーボールなどのコートもつくる計画だという。かくて宗像の地は益々〝オアシス〟として開発されて行くであろう。

常に元気でありましたのに、五月二十五日再び病床につかれて静養中であります。一日も早く全快なさるよう皆様と共にお祈り致します。

尚会は先年度の事業報告、会計監査報告、並に本年度の事業報告があり、役員改選等があった。

新役員は左記の通りです。

会長　竹内　信夫氏
副会長　近藤重次郎氏
副会長　前田　純一氏
会計　安川　浄生氏

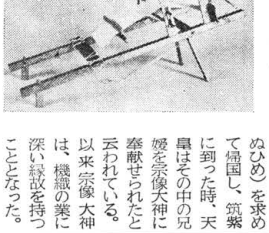
閉会のことばは、前田純一新副会長により締めくくられ、賑かに幕を閉じた。

宗像大社宝物館
宝物を訪ねて

金銅機織具

この機織具は、他の宝物と同様に既に出現していることを物語っている。

機織機は、材料が主に木や竹である為、極めて遺存し難い、しかしこの機織具は、織成に必要な器具が銅板に渡金して作ってある為全て備り、実際に織ることが出来る。



又当社末社として、兄媛弟媛の二神を御祭神とした縫殿神社がある。これは応神天皇の御代に、阿知主使が呉国に行き縫工女（きぬぬひめ）を求めて帰国し、筑紫に到った時、天皇はその中の兄媛を宗像大神に奉献せられたと云われている。以来宗像大神は、機織の業に深い縁故を持つことになった。

この古事からしても当社神津宮に機織具の奉献せられた意も肯ける。

宗像伝説　其の五十二

皷島

宗像郡津屋崎町の渡半島の突端から北方約二百米の海中に小さな岩島がある。高さ約二十米、周囲約三百米、これが皷島である。昔は太皷の形をしていたのでこう名付けられたが、いつの頃にか石材屋が削り取って、今では変形している。島の上には大きな松の木が立っていて長年の潮風に堪えており、玄海の絶景の一つとなっている。

対岸の渡半島附近には東北側に「長崎瀬」、西南側に「湯の瀬」などという暗礁帯があり、干潮の時はその頭を出す。この為に暗夜風浪の時などは漁船の遭難が多く、昔から恐れられている。

皷島には二つの古伝説がついている。

一つは、その昔神功皇后が三韓より凱陣された時に住吉大神、瀬織津姫神、志賀大神の三神が此の皷島に出現されたといわれる。

よって皇后は付近の海浜に神籬（ひもろぎ）を設けて祭祀を営まれたと伝えられている。「宮ノ本」という字名はこれに基くという。

もう一つは、むかし津屋崎浦の漁師が三人で沖釣りに出かけた。その時俄に風が起って波が荒れ、舟が転覆しそうになった。彼等は恐れおののいてひたすら神加護を祈った。と、海上に前記の三神が出現された。三人は驚喜して神助を求めた。三神は浪を折って漁船を導いた。漁師らは漸く皷島に漂着し、風浪の静まるのを待った。

三日経ったが天候は回復しなかった。三人は、今度は飢餓にさらされた。漁師らは又神に祈った。すると再び神が出現され、食を与えて彼らの飢を救われた。

神の去られた跡に三個の霊石があった。漁師らは奇異の感に打たれ、捧持して帰り、これを神体として社を建てた。名づけて浪折明神と称して奉斎した。これが後に明治五年十一月三日、村社浪折神社と定められた御社の起源であると云われている。

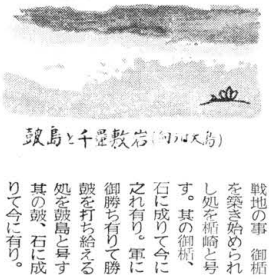
渡半島の南側の山には日本海戦記念の「東郷公園」があり、その西北に隣接した高地を猫崎山という。猫崎山には槌形の大石が沢山ある。

皷島と猫崎山については古記録がある。文安元年（1447）宗像大宮司氏俊の記名のある「宗像大菩薩御縁起」の最後尾に見える記載がそれである。

一、当神（宗像大神）異賊に対して最初の御合戦地の事　御楯を築き始められし処を楯崎と号す。其の御楯、石に成りて今に之れ有り。軍に御勝ち有りて勝鼓を打ち給える処を鼓島と号す　其の鼓、石に成りて今に有り。

一説に云う。

三韓征伐の後、御楯を此所に留め置かれ給うと云う。



皷島と千畳敷岩（向うは天島）

これが前記の古伝説を裏書きしていて興味深いものがある。渡半島は、南の方から「湯の瀬」、「くぐり岩」、「恋の浦海水浴場」、「楫の葉浜」、「千畳敷岩」があり、これが皷島と相対している。それを更に東に廻ると「長崎瀬」である。この辺一帯はすべて断崖で、洞窟が多い。附近海中には生物学上珍らしい「かぶとがに」が居る。海浜の化石類は県指定の天然記念物である。磯廻りは魚釣りに最適で四季を通じて賑わっている。

観光ブームと共に此の辺一帯も今に名所になるであろう。

そのかみの伝説を秘めて、皷島は静かに玄海の波に浮んでいる。

（H）

眺望絶景

生魚料理

―玄海の風味を食膳に―

あけぼの荘

宗像郡玄海町神湊
電話　神湊　六六番

（二頁よりつづく）

大井　安部　静子

あたしの出身地は大穂で、よく櫛形談会に移った。

本日の出席は特に御婦人が多く会の主旨として僅かな会費で運営され、誠に負担のかゝらない肩の凝らない楽しいものであった。

自己紹介等は実に愉快なもので、我が家のビーアールを折込んだもので、毛系屋さんあり、美容院さんありであった。

人が大穂の人は三月さんは知んなすまいと云いはれる山ん中ですた。又はあたしゃ河東で今頃ゴ雨が降りゃ、水びたしにつかりようと、今でちゃー心配しとりますばい、等と本当に郷土の事を常に安じ、心にかけられる会の方々のお心が有難く、本日の会に招待された私は、自すと頭が下り、心が豊かくなる思いでした。

（以下略）

宗像大社献詠 俳句作品集 (三十二)

明日の漁場を定規で計る夜涼得て　津屋崎　井浦　良介

〃　〃　久羽　文王

花あふち散り敷く道を通勤す　〃　〃　勝田　光一

ロダン展観て梅雨夕焼の階降る　〃　〃　西住喜三郎

屋顔の離にさびれし地引曳く　〃　〃　浜津　鴻浪

愛抱み背に業艘の灰降る気配　〃　〃　白石百合蔵

井戸堀のころ寝木槿の際借りて　厚　狭　篠田　南洞

遠蛙大地のものとして散策　東　郷　小野　淡坡

鵲の橋の流るゝ雨今宵　〃　〃　小野　花居

海へ行く帽子あれこれ子の笑顔

日立と共に五十年 (五)

倉田主税会長の半生記

鮎川は久原の義弟になる。思うに平は如何にも明治の日本人らしく、〝義理〟というものを重んじたのであろう。ドライに割りきる現代式の行き方もさっぱりしてよいが、こういう明治調のやり方も、なんとなく奥床しいものを感じさせるものである。

会社創立とともに日立工場の職制が改まり、課がなくなってすべての係が工場長直属となった。この職制改正により、新たに銅線係が設けられ主税がその係長となったのである。

大正十一年になると、年明け早々に鉄道省から薄付電車線について問合せが来た。その当時鉄道省は、東京、大阪の二大都市周辺の交通機関を全面的に電化しようとしつつあった。従って若し先方の要求にマッチする製品をつくりうるならば、大量の註文を取れる見込があったのだ。日立電線工場では、主税以下全員が協力して、この問題と取り組んで結果、棹銅を四十貫にして接続点を少なくすることが必要となった。一口に四十貫というけれども、これだけの棹銅を使って電線を作るということは、技術的に見て決して容易なものではないのである。然し、彼等はなんとかして成功しようと努力を続けた。漸く見本品を作って提出したのは十旬を過ぎていた。

「大丈夫だろうか、うまく註文が取れると方歳なんだが」主税達はこういって案じていた。実際、大口の註文を取ったら工場全体のために相当のプラスになるのである。二月にはいってまもなく、待ちに待った鉄道省から正式に註文を受けることが出来た。「乾杯だね、倉田君」「さっそく連中に飲ませますよ」「あんたもたまに飲んでよかろうが」「大いにやりますか」。高尾工場長も大に喜んでそんなことをいった。高尾に言われるまでもなく、主税はそうするつもりなのだ。平生から自分では飲まないけれど、部下の者に対しては決して禁酒を奨めたりしなかった。それどころか、ときどきは主だったものを自宅に呼んで御馳走するのである。「工場ではおっかないオヤジだが、うちへ行くとまるっきり優さしい。酒をついで貰いながら俺は考えてしまうんだ」「なにを」「この人が、昼間工場でガミガミなっていた倉田さんかと思ってさ」「ちがいない、まったくだ」彼等は、お互いの間でそんなことを言っていた。仕事については きわめて厳しいけれど一歩工場の外に出ると主税はまるで人がちがうように優さしかった。公私の別を実にはっきりの者は太洋漁業の関係で、山本さんが、燗つけ用の木炭は有田さんが持参して、当時としては実に豪勢な宴を張られました。その時に私も御案内を受けて、大層御馳走になりました。

去る六月二十七日、宗像郡津屋崎町の人気亭に於て、「八幡宗像会夏の総会」が催された。以下は同会の理事大和藤三郎氏の挨拶である。

委しいところ拙はよく解りませんが、記憶を辿って考えますと、従来、八幡製鉄所内には宗像会がありました。私は当時、製鉄の土地係長をしておられた田中武八さんに、町の方にも宗像会をつくるから、製鉄の宗像会と併して「八幡宗像会」を作りたい。斡旋を頼むと申し入れました。

そこでとりあえず、製鉄所側から、安永さんと、田中武八、有田憲太郎の三氏と、町側からは山路虎夫、石田和吉の両氏と私が世話役となり、この六名で、何回か会合を持って話し合いを進めたように記憶しています。

それから短時日のうちに二十四、五名の賛同者を得、これを以て、八幡宗像会が発足致しました。このメンバーの会合は数年間続きました。

さて、何年であったかよく覚えておりませんが、戦争も相当苛烈の度を加えた頃、安永さんが朝鮮の清津の製鉄所の所長に転任なさることを知りました。その頃は酒が非常に不自由な時でありました。酒屋の安部さんが沢山準備して下さって、安部さんの家の裏二階の大広間で盛大に送別会を致しました。そして赴任途中に飲まれるようにと上等の酒二本を贈りました。その時の記念写真が私のところにあります。それには安永さんが兄さんの高橋昇さんと抱き合って、とても嬉しそうなお顔をしておられます。今は何よりの記念写真と思います。

それから戦争はますます烈しくなり、宗像会の会も何年か空白が続いたように思います。

終戦直後のこと、思います。安永さんが清津から引揚げて来られ、春の町の寿旅館で歓迎会を催しました。出席者は安永さんと有田憲太郎さんと、山本惣輔さんでした。物資不足の時でしたが、酒とさせるのである。鉄道省の註文で万歳を叫んだ職工たちも、いざ製造となると血の出るような苦労をしなければならなかった。技術的にきわめて困難な作業が要求されたからであった。漸く完成して納入したときは、一同はクタクタになっていた。検査は上々の成績で、引き続いてまた後口の註文を貰うことが出来た。

日立製作所入社以来、現在までの五十数年間に、主税が日立工場で勤務したのは二十六年で、まさに半分以上である。この間の彼の生活は電線づくりが生命であった。荒引線から種々の絶縁線に到るまで、あらゆる種類の電線を研究しつくしたのだ。電線づくりの最初は、最も簡単な裸線であったが次第に高級なものを手がけるようになり、電線加工の仕事が大きな比重を占めるようになった。そして電線加工について主税の苦心は長く続けられ、それらの研究、試作時代に要した経費は莫大なものであったが、小平は惜げなく支出を認めてくれたのである。

大正十二年九月一日の、所謂、関東大震災は、日立製作所として相当の被害を蒙むった。然し日立工場はなんの被害もなかった。創立当時〝電気機械のような近代的文化の基礎となるべき商品をつくる工場が、日立村のこと片田舎に本拠を置くのはまちがいである〟――という意見が内部で論議されたことがあった。小平はそれに対して断呼反対し、あくまでも〝ここがよい〟といって、その意見に耳をかさなかった。それが美事に的中して、大震災に大きな被害を受けることなく済んだのである。この大震災の所、京浜地方に在った同業会社の工場は殆んど全滅ともいうべき災害を蒙むってしまった。いきおい、従来それらの工場へ行っていた註文が全国から日立に殺到して来た。そればかりでなく、壊滅した諸工場をも含めて、被災地方復興のための註文もどっどっと日立工場に集まって来る有様である。儲けるには絶好のチャンスといってよい。然し小平は、このとき〝漁夫の利〟をおさめようとしなかったのである。

彼は、社内に次のような訓示をした。「わが日立製作所は日本の日立である。いま、この大災害のために日本の頭部ともいうべき京浜地方は 実に惨憺たる状況にあるのだ。この際われわれは、京浜地方の復興を第一の任務とすべきである。みだりに他の地方からの註文を受けて工場をふさいではならない。京浜地方のために全工場の全能力を発揮して、一日も速かにこれが復興をはからなければならない」こう言って小平は、九州や大阪から山のごとく殺到した有利な註文を全部ことわってしまったのである。彼の真骨頂が遺憾なくこの一事にあらわれている。金儲けのチャンスを、このようにして小平は敢て利用しなかったが、彼の崇高な精神は報いられたのである。それは新しく取引をした顧客が、もとの取引先に復帰せず、いつまでも日立のファンとなったことである。更に各方面からの各種類にわたる註文の機械を作ることで日立の技術もおのずから急速に向上したのである。実際のところそれ迄は既存の各会社に対し、後進会社として一目置かざるを得なかった日立は、このとき以後一流の製作所として世間から認められその信用も更に一段と高まるに至ったのである。（つづく）

また安永さんは黄授綬賞をもらわれた時にも五万円寄付され、その他、時折り多額の寄付をされました。

安永さんは宗像会のことにはとても熱心で、会の行事にはつとめて出席されました。又、御本人も会に出るのが「気が楽で、こんな愉快なことはない」と常日頃申しておられました。そのことは、その想席にもよく現われていました。そんなことで、会員からも慕われていました。

ここで一言お伝えしたいことがあります。

終戦後、八幡市長の候補者に安永さんが推薦されたことがありました。ところが、安永さんは固辞なさる。そこで、私共に、宗像会からも、おすすめするように依頼されましたので、出掛けました。安部兵次さんの酒屋の二階で安永さんと、山本惣輔さんを迎えして、相当おすすめしましたが、矢張り、駄目でした。それどころか反対に私共に対して断ってくれるように頼まれました。すすめは出来ません。誠に残念で、痛憎に堪えません。

会を致しましては、この御感に報いるには、御遺骨も故郷の赤間に埋葬されてありますので、益にお参り致しまして、在り日の御徳を偲びたいと存じています。

安永さんが亡くなられましたので、八幡宗像会はその中心を失ったようで、心細い限りでございます。ここで宗像会は勤揺してはなりません。会員一同、心を合わせて、会の行事を行い、行事の時は必ず故人に黙祷を捧げて、行事を始めることが、何よりも故人の霊をお慰め申すことではないかと信じています。

故安永渡平大居士の御冥福を皆様と共に心からお祈り申しまして、故人を偲ぶ私の言葉と致します。

昭和四十年六月二十七日

八幡宗像会夏の総会に於て

理事　大和藤三郎謹言

八幡宗像会と故安永渡平さんをしのびて

又、戦争の影響によって、郷土の総氏神様である宗像大社も極度に荒廃しておりました。折しも有志の発起で宗像大社復興期成会が出来ました。その時の八幡の寄付金の割当が確か二百五十万円であったように思います。八幡の募金の責任者は、安永さんでありました。早速世話人が集まり、度々募金の話し合いを致しました。寄付の振当では、製鉄所が百万円を筆頭に、その他の大きな会社が六十万円位でした。残りの約九十万円が宗像出身の人等に当てられました。

その寄付も、安永さんが十万円、森田松平さんが十万円、そのほかの人に対しては、宗像郡の町村に八幡転任者の調査を依頼し、これに依って百円から何万円という寄付がとても早く集まりましてここに八幡宗像会面目を施したのでありました。この時に、殊の外安永さんの喜ばれたお顔が、今も髣髴と浮かびます。

ここに忘れることの出来ないのは、この寄付運動のために各地区に世話人をお願いしまして、その数が確か、百二、三十人ではなかったかと思いますが、これが、全員この機会に宗像会員になられたことであります。かくて宗像会は一躍百数十名の会員を擁して発足し、以来、健全なる発展を致しておるのであります。

その初代会長が安永さんでありました。会則、会費、年中行事、慶弔規定が決められました。

総ての行事は宗像大社を中心とし、特に田島祭生会（秋季大祭）には会員が相当の経費を出して家族連れで参拝することを決め、これは今日に至る迄、実行されているのであります。

玆に会の完全なる基礎は出来ましたが、会則で決めた行事を遂行するには経済に不安定な点がありましたので、いろいろ手を尽しました。製鉄所から援助を払い下げて貰い、宗像の産業組合に売るなどしましたが、これは長くは続きませんでした。

この時に古部真太郎副会長の斡旋で、安永さんと、山本工作所の山本惣輔社長、岡崎工業株式会社の岡崎春雄社長の諸氏から夫々十万円宛寄付をいただき、この三十万円の基本金のお陰で、現在曲りなりにも、会の運営をさせていただいているのであります。

宗像藪庵先生百話

南方華やかなりし頃

宗像太郎坊

終日遊ぶ矢安は夕茜が見え始めると、天に帰ろうと羽衣をつけ、しかし七番目の天女の羽衣だけがどうしても見つからない。天女は泣き出そうになって、お婆さんがどこかに隠したのでしょう。どうか返して下さい。お母様が心配して待っています」と再三哀願したが老婆は「わたしは何知りませんよ」と嘘をいう。その内に暗くなって来たので、他の六人の天女はしかたなく帰って行った。それを隠れて見ていた青年は早速、タケゴンの丘を馳けあがり、天女にあるだけの真情を吐露して、どうかわたしと結婚して下さいと申し出た。天に帰ることの出来ない天女は、青年の余りの心情についに意を決して、相手の願いを聴き入れた。

漁師達は天女が自分達の土地に住むことを大変喜びまた尊敬した。この美しい天女はやがてタケゴンの王となり、現在のタケゴンを創り上げた祖として、現住民の間に語り継がれている。現在、タケゴンの郡はその子孫だといわれている。ちなみに「タケゴン」とは、ガヨ族の言葉で「嘘をついた処」という意味である。

考えてみますと、安永さんは政治は嫌いで、ひたすら実業家として立って行く信念が強かったものと思います。その意気が晩年に大八幡製鉄の重鎮になられたのと思います。まさに宗像出身の大成功者の一人であると思うのであります。

かゝる経過を持って、八幡宗像会は三十有年の歴史を持つ会があります。今日のように発展した此の八幡宗像会を、市民で知らない者はないと申しても過言ではありません。

安永さんは、本当に郷土人の会をこゝ迄育てて下さった大恩人であります。その功績は実に偉大で唯々感謝あるのみであります。会の席上で何時もにこにことエビス顔でおられた安永さんは、今は居られません。永久にまみえることは出来ません。

「あゝ常陸丸」は紙面の都合により今月休載致します。

噛み酒

猿酒でも蜂酒でも噛んで造るのだから噛み酒というのであろう。そもそも酒を醸造するのを「かもす」というが、これは「かむ」より来た言葉である。麹の使用を知らない昔は、口中で飯を噛んで酒を造った。その作用は要するに、澱粉質にジアスターゼが作用して、糖化すれば、後は空気中の酵母がついて醗酵しアルコールが出来る訳である。

佳江金之助は、約四〇年前に、台湾台東の生蕃部落で噛んで造る酒を実際に見てきた男である。祭礼が近づくと古風のしきたりを尊んで、噛んで酒を造る。

それには十五歳から十八歳ぐらいの未婚の健康な少女達が四、五人選ばれて当る。少女達は平たい容器の碗りに集まり、少し柔めに炊いた飯を三本の指でつまんで口中に入れる。よく噛んで甘くなる。

猿酒で造った酒が「猿酒」なら人間が噛んで造った酒は「人酒」である。かりに、ミス・ニッポンの候補者達が集って、噛んで造った酒を「人酒」と名づけて売り出したら、おそらくその値は客同志でせり上げて、すばらしく高価な酒になるであろうかどうかは知らない。

（つづく）

我楽苦多告知板

○少々話しがかるが、M君が痔の治療を始めた。同僚がいたわりの心を籠めてM君を慰めた。

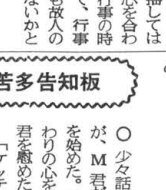
「ケッテイ（尻医）的に療養して下さいよ」

○T君と銀行員Y氏とは暮仇。顔を合わせる度に互いに弥次が飛び出す。或る日そのY氏がT君に

「てんで問題にならん、今度暮をする時は、左手で石を置いてやるよ」

T君、コーフンして

「よくも云ったなっ！」



容器にはき出してはまた、口中に入れ、甘くなるまで噛みつづける。容器に必要量がたまるとそれを止め、一昼夜たったころから飲む。住民氏が飲んだ時は、まだ甘酒程度でアルコール分はほとんどなかった。

日本書紀の木花咲耶比売の噛んだ矢の甜酒は、こんなものでもあったのか、いうまでもなくこれを水で薄くと醗酵して酒が出来てくる。

中村留二氏も、琉球でも祭礼の時に、小女達が集り、飯を噛んで酒を造る風習があるといっている。あらかじめ甘藷の茎でよく歯を磨き歯そを落して、海水でうがいをし、殺菌消毒してから噛むのでいっこう汚いという感じが起らなかった。宝島では今でも、祭礼の数日前に婦人が岩陰に隠れ、噛んで酒を造るそうである。

「かもす」は「かむ」ことである。

そして猿が噛んで造った酒が「猿酒」である。

宗像太郎坊